



TITLE:

海外日誌(三十一)

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 海外日誌(三十一). 天界 1925, 5(58): 437-440

ISSUE DATE:

1925-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160311>

RIGHT:

海外日誌 (三十二)

文部省在外研究員 山本 一 清

大正十三年十二月二十五日(木)

朝十一時、近くのノートルダムムの禮拜に行つたら、はからずも英國から來られたばかりの駒井氏夫妻に會つた。

午後は室住氏と三人づれで、散歩して、アイフェル塔の中段まで登り、歸途、ナポレオンの墳墓を見た。

夜はイタリヤ街の電氣館で「エニスの商人」といふ活動畫を見た。

十二月二十六日(金)

午前中は天文臺。

午後一時半、兩人で、アンブリッド停車場から電車にのり、まもなくムードン着。それから村の廣場にラブレインの像など見た後、嚴めしい天文臺の門内の、景色の好いテラスを暫く散歩。初代の臺長ツヤンセンの像を見た。―古い城跡が此の「天體物理の天文臺」として用ゐられてゐるのは思ひ付きには違ひないけれど、觀測室と研究室とが五六丁も離れてゐるのは、さぞ不便だらうと思はれる。自分等にしても、始め、入口をさがすのに可なりまご／＼した。臺長は不在であつたが案内されて、大きな太陽鏡や分光寫眞機、九時及び三十二時赤道儀を見、其の他、ペロー氏の干涉計や、二三歴史的器械など見た。四十時の大反射鏡が使はれてゐないのは惜しい。―總じて、こゝも貧乏風に荒されて、人も少なく、經費も不足で、研究は停滯がちさば氣の毒。

十二月二十七日(土)

朝は天文臺。―ハイデルベルヒのマクス・シュルツ臺長が去る二十三日牡牛座に逆行中の彗星らしい一天體を發見したといふ電報を見た。

夕方、駒井氏を訪ひ、同氏夫妻と四人で、湖月で晚餐。

十二月二十八日(日)

二三日の内に、イタリヤへ向け、パリを出發するつもりで、今日は

終日宅で荷作り。―天氣も悪いので外出の心も起らない。

十二月二十九日(月)

午前中、天文臺。新着のポピュラー・アストロノミ十二月號に自分の太陽研究の一抜粹が載り、又、同時に清いた大英天文協會誌十二月號には、先日の自分のアドレスが好く載つてゐるのを見る。

午後は兩人で外出して、リザリ通りで買ひもの。

伊太利フレンチエ天文臺のアベチ臺長より丁寧な招待狀が來た―

十二月三十日(火)

午前中は例により天文臺。

折角、荷作りまでもやり、明後日は愈々バツを立つつもりではあつたが、天文臺に未だ何となく残つた仕事があるやうに感じ、英子も同様パリを離れにく、思ふので、急に決心を翻し、一月の中旬まで今のまゝ、滞在をつづけること決めた。ために、始め計畫してゐたパレストナ旅行は無期延期となる。

近報によれば、ハーグの天文臺には「ボンド天文クラブ」といふものが生れた由。それ見よ、自分の豫言した通り。

十二月三十一日(水)

朝九時半から、やはり、天文臺へ。

午後、英子と散歩して、川端のゴーチエー・ギラー店で本年度の經度周年報を買つた。―こんなものが日本でも出来れば便利であり。又、教育的だらうと思ふ。

パリが、クリスマスよりも、むしろ新年を一層楽しむといふ氣分は、實に意外であつた。此頃も、やはり、クリスマス以來の店々の賑はひは、日に／＼増すばかりで、衰へない。イタリヤ街やモンマルトルあたりは夜半を過ぎて益々人が出盛るとは「流石にパリならでは」と、驚かされる。

大正十四年一月一日(木)

今日から天文時なるものが減びて、天文上の時刻が常用時と同じものになる。

元旦にも拘らず殆んどお晝頃まで朝ね坊をした。午後、兩人で散歩に出て、ボアド・ブローニッを、サン・クルー門から歩き歩き、高尙で静寂な此の森の公園にのんびりと時間を費した後、夕方歸宅。御正月のしるしに、今夕は大きな海老を買ひ込んで来て、食卓を飾った。

一月二日(金)

朝九時半から、天文臺へ行く。入口でバヨール臺長に會つたら、「圖書係りが休暇で休んで居ますが、室が開きませんが知らん？」と心配顔であつたが、小使君が開けてくれた。――ふと、キルソン山から招かれて来てゐるリチャー教授と其の廣い工場が此の天文臺の三階を占領してゐることを知つた。

風と雨とが強い。

一月三日(土)

やはり、午前中は天文臺。――前年の上半期を以つて、正式登録の小遊星の数が一〇二四星に上つた。

天氣が悪い。今日はパリ・ロンドン間のあらゆる交通が止まつて了つたこと。

一月四日(日)

一日中、在宅した。時々、室住氏の室を訪れて話した。

新聞によると、昨日、米國からエール大學天文臺のシレーンデヤール臺長が新しい二十七時の寫眞望遠鏡を携へて、當國シエルブールに着いたといふ。言ふまでもなく、之れは、同天文臺の出張所が南アメリカのシヨハネスバークに設けられるための、臺長の出張途上である。いよいよシヨハネスバークが、エール及びライデン兩天文臺と聯合して、南半球の肝腎な所になる日が實現されるのだ。

一月五日(月)

朝、天文臺例の通り。歸りにアラゴ通りへ出て、アラゴの大きな銅像を見た。

午後、本屋をあさり歩き、近刊のボク氏天文學史其の他を買つた。

一月六日(火)

朝、天文臺行き。久しぶりに暖かで、空も美しく晴れ。行く途中、アダム・ヒルガールの店へ寄つて、學術器械雜誌一冊を買ひ、近頃シメイ天文臺に買はれて行つた四十吋反射鏡の記事を見た。――今日は午後天文臺へ行き、リチャー氏に會つた。

夕方、散歩して見ると、ソルボヌ大學の天文台に燈火がついてゐる。參觀人をでも案内してゐるのか。

一月七日(水)

午前中、天文臺。

午後は兩人で散歩、駒井氏を訪れた。

今日からパリでは國際經濟會議が始まるので、新聞紙上は大賑はひ。

一月八日(木)

珍らしく氷が張つたほご、今日はパリも寒い。

朝のうちは天文臺。ベルリン天文計算局からの本年度の小遊星表が来た。

午後まちを歩いて、始めて日本人會へ日本新聞などを見に行つた。

一月九日(金)

朝は天文臺。

午後、スュゼ街にフランス天文學會の事務所を訪ひ、世話役のバロール氏に會ひ、賣り物に出てゐる望遠鏡や天文書などについて聞き合せて。會員の訪問客などが可なりあつて、老人の仕事は相當に忙ばしいらしい。

夜、英子と武林方へ行つたので、自分は其の送り迎へ。

一月十日(土)

天文臺へ行つたら、ロイヤル天文學會の月報十一月號が着いて、自分の文が載つてゐる。十一月號が今日現はれるとは、少々變な氣がするほご遅い。

午後、英子と共に日本人會へ晚餐を食べに行つた。其の時、ふと、机上の一雜誌を見て、東京天文臺が愈々去る九月一日以來三鷺村の新敷地に移つたことを知つた。

一月十一日(日)

これが最後のバリの日曜日で、午後にはルーヴル美術館へ行き、今までに見残して置いていたエジプトやバビロニアの發掘物、それからルイ王朝時代の立派な什器などを見た。中にも、バビロニア部に月の神や金星の神や木星の神の面白い像を見、又、エジプト部に有名なデンデラの星座の畫を見たのは興味があつた。

一月十二日(月)

天文臺で、天文史の著者ボケ氏に會つた。
午後二時頃、同志社の大塚、恒藤兩氏來訪。久々の面會で、御互ひの旅行の話などする。

一月十三日(火)

天文臺で最近のネチユア誌を見たら、シユスター教授が昔し初めてバリ天文臺でルゼリエー臺長に會つた時の逸話が載つてゐるのを讀んで面白いと思つた。毎日、ルゼリエーの像を仰きながら此の天文臺に出入してゐる自分に取つては。

夕刻、若いバヨー氏と同夫人と案内して、吾々二人はケプルル街の湖月へ日本食を食べに行つた。すきやきは何れも御氣に召したが、さしみは夫人の方が持て餘してゐられたのは御氣の毒。其の時の話に、自分は「エトワルの近くの某街の裏に、上から見れば、一つの天文ドームが見えるのは何ですか」と聞くところ、あれはアストリア・ホテルのものです、戦事中、あれがドイツに内應して、色々の情報を送つて(無縁で)ゐたものです」との説明であつた。

一月十四日(水)

午前中は天文臺。近頃發見のナルフ彗星が十一年週期のものだといふ電報が來てゐたが、どんなものか?

夕方、日本人會へ行つて、室住氏と、御互ひに別れの晚餐。

一月十五日(木)

天文臺へ行くのは、いよいよ今日が最後。リチー氏に挨拶した序でに、其の大きなガラス磨き工場を見せて貰つた。リチー氏はヤーキースの二十四時や、キルソン山の六十時や百時などの大鏡をみがき上げた人で、全く「二十世紀の大ハシエル」と評名される人であるが、目

下は此のバリに來て、二百四十時直径といふ途方もない大きな天文鏡の製作に従事してゐられる。勿論之れにはガラスを繋ぎ合せるので、其のための特別なセメント研究に永い時日を費されたが、其れは成功したさて、實物を見せられたりした。

午後、宅で荷作り。三時頃、トラランク一つとカパン一つとを先づリオン停車場に運ぶ。

今日、朝、峰谷女史、又正午には松本(敏)、永井兩氏に來訪せられ、久しぶりの話をした。

一月六日(金)

今日はバリ出發の日。朝から残つた大小荷物をしぼり上げ、午後には此等を停車場に運び、全く宿を引き拂つた。

午後九時半、リオン停車場からマルセイユ行きの急行列車にのる。人は込ます、車内で樂々眠つた。

一月十七日(土)

朝十時マルセイユ着。此の地は嘗て來たことがあつて、地理は好くわかつてゐる。すぐ、日本郵船會社支店へ行き、荷物の事や、乗船切符の件につき、交渉をすませ、午後は暇を利用して、前に見残して置いたシャトー・デフ島へ舟遊びに出かけた。バリと違つて、流石に南佛の空は美しいし、風も穏かで、全く好い心持であつた。城内の巖窟は大した人物でもなかつたけれど。

午後七時半マルセイユ發車、セノゾに向ふ。

一月十八日(日)

夜の二時半伊太利國境を越えて、ゲンチミリア着。こゝで例により税關検査。それから午前四時(中欧時刻)同所を發し、心地よく眠りつゝ、行く中に、朝九時セノゾ着。こゝで乗りかへ、イタリ・リゾエラの明るい景色を見ながら南下す。

午後一時、ピサに着く。こゝでは何よりも先づ市の北端の大寺院境内へ行き、有名な斜塔に登つた。「ガリレオが此の上から物を落して、落下の法則を人々に説明した」とこゝなど思ひながら見る。次いでドームの中の天井から長く吊された燈を見て、又、「之れでガリレオは振り

の等週期を發見したのだ」といふ事も興味深く見た。

ピサの市中の光景や、アルノ川の流れなどは左程にも興味を惹かなかつた。日ががらん／＼と照りつけて、植物の少ない此の市は吾々に取つて可なり殺風景に見えた。それよりも、やはり、所謂「ガリレオの生れ家」といふものを狭い街路の一方に見たことが、さまざまの連想をそ／＼と、幾度となく其の前を低回せしめた。

午後六時ピサ發。

八時半フイレンツエに着き、ホテル・パリオニに入る。

一月十九日(月)

午前中に、ドーム、パラツォ・デキオ、ラウリ館、ウフィチ美術館等を見た。流石にイタリ一隨一の藝術都市で、此の種の見物が多いため、短時間に見るのは可なり忙しい。全く、第一流の作品にのみ限らなければ到底日が足りない。

午後は二時頃から電車で郊外アルツェトリに行き、天文臺を訪れた。生憎、臺長は不在であつたが、偶然、臺長の父君に會つた。又、一助手が親切に建物の内外を案内してくれられたため、十一時の赤道儀や、九時の寫眞望遠鏡や、立派な研究室や圖書室を見ることが出来た。昔し、ガリレオが住んだアルツェトリの家といふのが、天文臺の屋上から見えた。明日、又、来るさ約束して置いて、今夕は宿に歸つたら、八時頃になつて、臺長自ら吾々のホテルへ來訪せられ、明日は朝、大學の開校式に案内すると言はれた。

一月二十日(火)

今日は當地の大學開校式が十時からあるので、吾々は天文臺長アベチ氏夫妻に案内せられ、式場に入り、最初の好い席を與へられた。式には文部大臣が臨席し、ビシヨブや總長などの祝辭もあつて、可なり面白いものであつたが、言葉が總てイタリ語で、了解しにくい、それに時節柄、學生たちが政治的(反フラスチの)示威運動をやつたりして非常に式場が騒々しかつた。

式後、自分等は臺長等と別れて、まづアカデミにミケランゼロの傑作「ダヴィデ」などを見、後、ビテ美術館でラファエルの作などを見た。

それから三時には、約束の如く、ホテルに歸り、更にスプランシャー氏の自動車にのせられて、アルツェトリの天文臺に行つた。天文臺では、臺長宅で教授夫妻に迎えられ、テイを頂きながら談笑。夕刻、文部大臣フイテレー氏の一行が天文臺へ來觀られたので、自分は台長と共に之れを迎えた。大臣は天文望遠鏡の説明をきくよりも、屋上から見下すフイレンツエ市の景色の方が御氣に召しならしい。——一行が去られた後、自分は台長につれられて、二十二メートルの太陽塔に登つた。塔は未完成ではあるが、南奇りの好い位置に置かれ、ドームの大きさも可なり大きく直下には深き十メートルの井戸が堀り、全くキルソン山の六十呎塔と同じ様なものであるが寫眞觀測等の器械類は遙かに新式のものらしい。何となく、キルソン山を除いては、全歐洲に比を見ない。此の設備が見事に進歩しつゝあるのを見るのは愉快であつた。此天文台は目下太陽の紅暈觀測上の世界の中央局であるが、將來は太陽學の方面に更に重大なるものとなるだろう。

夕方下山、ドームの近くのポロニア亭で生粹のフイレンツエ料理を食べ、午後十一時半、ローマ行きの流車にのる。

一月二十一日(水)

朝七時半ローマ着ホテルキリナールに入る。

ローマの見物は、まづ、コリシウム(圓形野天劇場)から始め、有名なフォルム、ミバラチノ丘上の遺跡をも、一氣に見た。何と言つても、二千年前の古い跡を目の前に見ることは、總てのものか勿體ない程に思はれた。

フォルムミバラチノ丘まで、可なり疲れたので、午後はゼネチア廣場でエマヌエル王紀念堂を見たのち、賑はしい現代市街に出て、大學やバンテオンなどを見た。それから、夕暮近く、ポポロ廣場から車馬を驅つて街路を見ながら宿に歸る。